

新生児養育に関する研究(第3報)

研究班長 内藤 寿七郎

児の栄養方法と母親の妊娠中および出産後における 諸条件との関係(第II報)

研究第4部 山内 愛
原田 節子
水野 清子
土井 正子
武藤 静子

1 目的

第一報¹⁾において農村部(群馬県中之条町、長野県更埴市)と都市部(愛育病院産科外来)について研究対象妊婦の家庭環境、妊娠・分娩の経過、栄養のとり方などを比較した。

今回は同一対象についてさらに出生児の栄養法別に集計し、母乳栄養がどのような条件において、より多く行なわれるかを検討した。

2 研究方法

1) 対象地区

農村部	群馬県	81例
	長野県	79例
都市部	愛育病院	75例

2) 調査期間

昭和46年4月～47年8月

3) 研究方法については第1報¹⁾に詳述した。

3 研究結果

栄養法別比率は第1報に詳述したが、生後1カ月目における本対象児の栄養法は、昭和45年発表の厚生省値に比較するといずれの地区でも母乳栄養が多く、人工栄養が少い。殊に群馬地区は著るしく母乳栄養が多かった。

以下これら栄養法と家族構成特にしゅうと、姑との同居と核家族。母親の学歴。母性意識。妊娠経過等との関係について検討する。

1) 対象家庭を核家族と同居家族にわけて母乳栄養が何れの家庭に多いかを調べてみた。

核家族については妊娠5、6カ月の時点で、夫婦のみをAとし、夫婦と子供のある家庭をBとした。同居家族はしゅうと、姑またはその何れかと同居しているもので、他に夫の弟妹あるいは祖父母のいる場合もある。

その他についてはしゅうと、姑のいない家庭で夫婦、子供以外の家族との同居の場合である。

家族構成を以上の4つに分類して、生後1カ月目の児の栄養法との関係をみると第1表の通りになる。

群馬—母乳栄養と人工栄養との割合を核家族AとBにおいて比較してみると、Aでは母乳栄養が人工栄養の8倍、Bでは5倍で明らかに子供のある家庭における母乳栄養は少ない。

次に同居家族とAとを比較すれば、同居家族の母乳栄養は人工栄養の約7倍なので、ややAが上廻っている。したがって母乳栄養の多いものはA、同居、Bの順序になる。

長野—同様に核家族AとBとを比較すれば、Aでは母乳栄養が人工栄養の2.7倍に対し、Bでは均にしかすぎないので、Aに母乳栄養が多い。次に同居家族では母乳栄養は人工栄養の1.8倍なので、やや核家族Aの母乳が優勢である。したがって群馬と同様A、同居B、の順になる。

愛育—核家族AとBとの比較では農村同様Aに母乳栄養の家庭が多く、同居家族とAを比較すれば、Aでは母乳と人工の比が3.1:1であるのに対し、同居家族では

第1表 家族構成と乳児栄養法

対象地区 栄養法	群 馬				長 野				愛 育			
	総 数 例	母 %	混 %	人 %	総 数 例	母 %	混 %	人 %	総 数 例	母 %	混 %	人 %
核 家 族 A	26	65	27	8	15	53	27	20	30	53	30	17
核 家 族 B	10	50	40	10	9	11	56	33	32	37	41	22
しゅうと・姑同居 族	42	67	24	9	55	47	27	26	12	42	25	33
そ の 他	3	100	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総 計	81	65	26	9	79	44	31	25	74	45	34	21

A：夫婦のみ（妊娠5・6カ月調査時点において）

B：夫婦と子供（ ” ” ）

第2表 母親の学歴別乳児栄養法比率

対象地区 栄養法	群 馬				長 野				愛 育			
	総 数 例	母 %	混 %	人 %	総 数 例	母 %	混 %	人 %	総 数 例	母 %	混 %	人 %
大 卒	0	0	0	0	1	100	0	0	27	48	37	15
短 大 卒	4	50	50	0	3	33	0	67	16	31	38	31
高 卒	36	53	33	14	53	42	36	22	29	48	31	21
中 卒	40	80	15	5	21	52	24	24	1	100	0	0
そ の 他	1	0	100	0	1	0	0	100	1	0	0	100
計	81	65	26	9	79	44	30	26	74	45	34	21

1.3:1となっているので、明らかにAに母乳栄養が多く、またBでは1.5:1となっているので、僅かに同居家族より上廻っているといえようか。したがって核家族A, B, 同居家族の順序である。

最初われわれは姑との同居が母乳栄養の確立に役立つのではないかと考えていたが、農村、都市ともに逆の傾向を示し、夫婦のみの核家族に母乳栄養が最も多く、特に都市においてはその傾向が強かった。

しかし子供のある核家族では、農村においては同居家族より下廻り、都市においては僅かに上廻っていた。

湯川氏²⁾らは家族構成と母乳栄養には関係がないことを報告しているが、われわれの調査では核家族を夫婦のみと、夫婦と子供のある家庭とに分けたこと。生後1カ月までの追跡調査であること等によって異なる結果が出たのではないと思われる。

次にこれらの結果は何を物語っているであろうか、同居による精神的緊張、あるいは不満、都市においては特に住宅事情によるプライバシーを保つことの困難性等が

あげられよう。

また家庭における老人の座の軽視とともに、育児においても姑の経験が重んぜられなくなってきたことなども考えられるのではなからうか。

しかし同じ核家族でも、子供がある場合には、母乳栄養は著るしく低下する。長野ではその傾向が特に著るしかったが、育児の多忙さが主婦専業者の少ない農村では都市以上に母乳栄養の確立の障害になるのかも知れない。

2) 母親の学歴と乳児栄養法

母親の学歴が乳児栄養法とどのような関係にあるかをみると第2表のようになる。

群馬、長野では大部分が高卒および中卒で占められている。

群馬—高卒より中卒のほうが遙かに母乳栄養が多く、母乳栄養80%にのぼり、人工栄養は5%にすぎない。高卒では母乳栄養55%、人工栄養は14%であった。

長野—群馬同様に、高卒より中卒に母乳栄養が多かつ

第3表 妊娠9カ月に表明した予定の乳児栄養法(愛育)

学歴別	妊娠9カ月に表明した予定の栄養法	総数 例	実行した栄養法					
			母乳		混合		人工	
			実	%	実	%	実	%
大卒	母乳	17	10	59	5	29	2	12
	混合	9	3	33	5	56	1	11
	人工	1	0		0		1	
	計	27	13		10		4	
短大卒	母乳	10	4	40	3	30	3	30
	混合	6	1	17	3	50	2	33
	人工	0	0		0		0	
	計	16	5		6		5	
高卒	母乳	19	10	53	5	26	4	21
	混合	10	4	40	4	40	2	20
	人工	0	0		0		0	
	計	29	14		9		6	
総計		72	32		25		15	

第4表 母乳栄養を撰択した理由

理由	学歴別	大卒(%)		短大卒(%)		高卒(%)	
		実	%	実	%	実	%
子供の健康によいと思う		14	52	8	5	15	52
自然だから		8	30	3	19	6	21
母と子の愛情が深められるから		5	19	7	44	6	21
経済的だから		5	19	3	19	2	7
頭脳がよくなるから		0		0		0	0
手がかからないから		2	7	3	19	3	10

たが、42、52%とその差は少なかった。群馬にくらべて人工栄養の多いのが目立った。

愛育一大卒、短大卒、高卒の母乳栄養比はそれぞれ48、31、48%。人工栄養比は15、31、21%で乳児栄養法と学歴の間には一定の関係はみられなかった。

アメリカでは最近学歴の高い階層、また社会階層的に上流クラスに母乳栄養が多くなりつつあることが報告されているが、農村ではむしろ従来いわれてきたように学歴の低い階層に母乳栄養がみられた。これらについては地域および家庭の経済問題と合わせて考えてみなければならぬ課題であると思われる。

また対象妊婦に比較的大卒者の多い愛育病院の調査結果にも学歴の高いものに母乳栄養が多いという傾向はあらわれていなかった。これは今回の都市対象者はすべて愛育病院で指導を受けて同程度に母乳栄養がすすめられているのであるから、当然といえば当然であるかも知れない。

(1) 学歴別にみた母乳栄養への関心度

大卒、短大卒の比較的多い愛育について、妊娠9カ月の時点において表明した出生後の予定の栄養法は第3表の通りであった。

すなわち、大卒、短大卒、高卒の各群とも母乳栄養と混合栄養が大体2対1の比率で選ばれており、三群の間にほとんど開きはなかった。混合栄養を選んだものの大部分はすでに第一子のときに母乳不足の経験があったものである。

次に大卒では母乳栄養を選んだもの17例の中、実際に母乳栄養で哺育しているものは59%で、始めの願いにもかかわらず混合または人工になったものは29、12%となっていた。

混合栄養を選んだものについては56%が実際に混合栄養で母乳だけで哺育できたものが33%みられた。

短大卒では母乳栄養を選んだ中、40%が実際に母乳栄養を実行でき、残りは混合、人工共30%で同率であった。

高卒では同様に、約半数が母乳栄養を実施、残りは混合、人工が半数づつを占めていた。

混合を選んだものでは、母乳と同率の40%が混合で、人工になったものは残りの2例であった。

以上総合すれば、妊娠9カ月の時点で母乳栄養を選んだものの中、予定通り実施出来たものは大卒59%、短大卒40%、高卒53%であった。しかしこれは出生後1カ月の時点での児の栄養法なので、さらに月齢が進めば減少すると思われるし、例数も少ないので早急な結論はさけない。

(2) 母乳栄養を撰択したものについて、その理由は第4表の通りである。大卒、短大卒、高卒何れの場合でも「子供の健康によいと思う」というのが第1位を占め30~40%で、第2位は「母乳が自然であるから」とする理由であった。しかし短大卒には「母と子の愛情が深められるから」とするものが第2位になっていたが、これはあるいは学生時代にこのようなことを教わったからかも知れない。また「母乳が経済的であるから」とする理由が高卒よりも大卒に多いのはいわゆる常識とは逆の数字のようで、考えさせられる問題であろう。

3) 妊娠5、6カ月および9カ月における妊婦の健康状態と乳児栄養法

第5表A 妊娠5・6カ月時における健康状態

地域別		母乳								混合								人工							
		群馬		長野		愛育		計		群馬		長野		愛育		計		群馬		長野		愛育		計	
		実	%	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%
妊娠5~6カ 月時における 健康状態	良	18	34	6	17	9	27	33	27	8	38	3	13	4	16	15	21	2	29	5	25	5	31	12	28
	不良	35	66	29	83	24	73	88	73	13	52	21	87	21	84	55	79	5	71	15	75	11	69	31	72
	計	53	100	35	100	33	100	121	100	21	100	24	100	25	100	70	100	7	100	20	100	16	100	43	100
健内 康状 態不 良の	風邪	14	40	7	24	3	13	24	27	3	23	4	19	4	19	11	20	3	60	6	40	2	18	11	36
	下痢	2	6	0	0	2	8	4	5	2	15	1	5	3	14	6	11	2	0	1	7	1	9	2	7
	つかれ	16	46	18	62	19	79	53	60	8	62	17	81	17	81	42	76	2	40	8	53	9	82	19	61
	頭痛	6	17	11	38	1	4	18	21	0	0	5	24	0	0	5	9	0	0	3	20	0	0	3	10
	その他	3	9	6	21	4	17	13	15	2	15	2	10	4	19	8	15	0	0	3	20	1	9	4	13
	計	41	42	29	112	15	29	28	72	5	21	13	39												

第5表B 妊娠9カ月時における健康状態

地域別		母乳								混合								人工							
		群馬		長野		愛育		計		群馬		長野		愛育		計		群馬		長野		愛育		計	
		実	%	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%	実	%
妊娠9カ月時 における健康 状態	良	48	91	28	80	29	88	105	87	18	86	16	67	20	80	54	77	7	100	17	85	10	63	34	79
	不良	5	9	7	20	4	12	16	13	3	14	8	33	5	20	16	23	0	3	15	6	37	9	21	
	計	53	100	35	100	33	100	121	100	21	100	24	100	25	100	70	100	7	100	20	100	16	100	43	100
健内 康状 態不 良の	病気がち	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2					
	健康がすぐ	4	5	2	11	3	4	2	9	0	2	9	0	2	0	2	0	2	0	2					
	れない	1	1	2	4	0	2	0	2	0	2	0	2	0	2	0	1	2	2						
	つかれ	1	1	2	4	0	2	0	2	0	3	5	0	1	2	3									
	その他	1	1	2	4	0	2	0	2	0	3	5	0	1	2	3									
計	6	8	7	21	3	8	5	16	0	3	6	9													

第6表 妊娠中の経過及び分娩の状態と乳児栄養法

(○—正常, ×—異常)

妊娠経過	産後の状態	群 馬				長 野				愛 育			
		総数例	母 %	混 %	人 %	総数例	母 %	混 %	人 %	総数例	母 %	混 %	人 %
5・6 カ月	9カ月												
○	○	20	27	27	14	10	12	9	20	14	18	12	32
×	○	35	49	41	0	39	57	46	40	34	50	52	32
○	×	3	6	0	0	4	3	8	5	1	3	0	0
×	×	15	18	9	43	15	14	29	15	15	17	24	18
	分娩時に異常のあったもの ×	8	0	23	43	11	14	8	20	10	12	12	18
総 計		81	100	100	100	79	100	100	100	74	100	100	100

山内他：児の栄養方法と母体の出産前後の諸条件の関係

第7表A 妊娠5・6カ月の食欲

地区	群 馬					長 野					愛 育				
	総 数		母	混	人	総 数		母	混	人	総 数		母	混	人
	実数例	%	%	%	%	実数例	%	%	%	%	実数例	%	%	%	%
食欲がある	30	37	41	24	43	31	39	34	29	60	33	44	42	36	63
普 通	39	48	45	66	14	36	46	46	54	35	34	46	46	56	31
食欲がない	4	5	4	5	14	9	11	14	13	5	5	7	6	8	6
む ら	7	9	8	5	29	3	4	6	4	0	2	3	6	0	0
そ の 他	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	81	100	100	100	100	79	100	100	100	100	74	100	100	100	100

第7表B 妊娠9カ月の食欲

地区	群 馬					長 野					愛 育				
	総 数		母	混	人	総 数		母	混	人	総 数		母	混	人
	実 数	%	%	%	%	実 数	%	%	%	%	実 数	%	%	%	%
食欲がある	例 37	46	45	38	71	例 16	20	29	12	15	例 24	33	36	24	38
普 通	33	41	43	38	29	48	61	54	71	60	39	53	43	64	56
食欲がない	6	7	6	14	0	12	15	11	17	20	6	8	9	8	6
む ら	5	6	6	10	0	2	3	6	0	0	4	5	12	0	0
そ の 他	0	0	0	0	0	1	1	0	0	5	1	1	0	4	0
計	81	100	100	100	100	79	100	100	100	100	74	100	100	100	100

妊娠5, 6カ月および9カ月の時点における健康状態を良, 不良にわけてみてみた。不良としたものは風邪, 下痢, 頭痛, つかれ等何らかの症状, または訴えのあったものである。

群馬では健康状態の良好なものは混合群に最も多く, 38%で全体の1/3強, 次いで母乳, 人工栄養の順で, 34, 29%と三者の間に大きな開きはなかった。

長野, 愛育では逆に混合群が最も健康状態良好なものが少なく, 13, 16%で人工群は愛育, 長野とも混合群の約2倍程良好なものが多い。母乳群はその中間で長野17%, 愛育27%となっていた。

また母乳, 混合, 人工とも長野地区が最も健康状態良好なものが少ない。

妊娠9カ月では, 各群とも健康状態良好なものが大部分を占め, 群馬では86%以上のものが, 長野, 愛育ではそれぞれ67~85%, 63~88%が良好であった。

長野, 群馬では良好なものは人工, 母乳, 混合の順に多く, 愛育では母乳, 混合, 人工の順に多かった。

以上各期各地区を通じて必ずしも母乳栄養群が健康状態が良好という結果はみられなかったが, 群馬地区には人工栄養が著るしく少ないので, さらに例数をふやして検討を加えなければならない。

次に健康状態不良の内訳をみると各地区, 各群とも最も多いのは「つかれ」で, 5, 6カ月では群馬40~62%, 長野53~81%, 愛育79~82%となっており, 愛育が最も疲れの訴えが多かった。

次にあげられたのは群馬では風邪23~60%, 長野では風邪または頭痛で19~40%, 愛育では13~18%となっており, 風邪または頭痛は農村に多かった。つかれを訴えるものが都市に多かったのは, 今回のような質問紙法による調査では「つかれ」の表現があいまいで主観的な要素に左右されやすいために農村の婦人は都市の婦人にく

第8表A 妊娠5～6カ月の睡眠時間

(総数の例数以外は%)

地区	群 馬					長 野					愛 育				
	総 数 (例)	数 (%)	母	混	人	総 数 (例)	数 (%)	母	混	人	総 数 (例)	数 (%)	母	混	人
7時間未	0	0	0	0	0	3	4	2	0	1	0	0	0	0	0
7～8	17	21	13	3	1	27	34	13	8	6	27	37	14	9	4
8～9	40	49	25	12	3	38	48	16	13	9	29	39	13	6	10
9以上	24	30	15	6	3	11	14	4	3	4	18	24	6	10	2
計	81	100	53	21	7	79	100	35	24	20	74	100	33	25	16

第8表B 妊娠9カ月の睡眠時間

(総数の例数以外は%)

地区	群 馬					長 野					愛 育				
	総 数 (例)	数 (%)	母	混	人	総 数 (例)	数 (%)	母	混	人	総 数 (例)	数 (%)	母	混	人
7時間未	1	1	0	1	0	4	5	2	0	2	2	3	2	0	0
7～8	17	21	14	2	1	21	27	11	7	3	25	34	12	7	6
8～9	37	46	19	12	6	40	51	17	13	10	26	35	13	8	5
9以上	26	32	20	6	0	12	15	4	3	5	21	28	6	10	5
無記入	0	0	0	0	0	2	2	1	1	0	0	0	0	0	0
計	81	100	53	21	7	79	100	35	24	20	74	100	33	25	16

らべてその表現がうちな場合が多いためかも知れない。

妊娠9カ月では健康がすぐれない、つかれ等の訴えは少なく、長野の母乳群の中、「健康がすぐれない」5名が最も高く、他の群では2～3名程度にすぎなかった。

次に健康状態の良好なもの、自覚症のないものを、正常とし、つかれ、頭痛、ひどい便秘等何らかの自覚症を覚えるもの、風邪、下痢、貧血等病気のあるものを合わせて異常として妊娠経過を追跡してみた。その結果は第6表の通りである。

妊娠中一分娩をも含めて正常であったものは愛育、長野ともに人工群に多く、群馬では母乳、混合群に多かった。

しかし妊娠5～6カ月に問題があっても、9カ月時の調査において正常と答えたものは母乳、混合群に多く、人工群に少なかった。

また分娩時に異常のあったものは人工群に多かった。殊に群馬では分娩時の異常は母乳群には全くなかったのに対し、人工群では7人中3人が異常分娩であった。

4) 食欲

妊娠中の食欲について次の4段階に分けて集計すれば第7表A、Bのようである。

①食欲がある。②普通。③食欲がない。④むら

「食欲がない」「むら」等食欲に問題のあるものについてみれば、妊娠5、6カ月では長野、愛育ともに母乳群に多く、それぞれ20、12%を占め、人工群は最も少なくて5、6%となっていた。

妊娠9カ月でも大体同様の傾向を示した。

群馬では人工栄養にこの比率が高くなっているが、7例しかないので比較出来ない。

「食欲がある」「普通」等正常な食欲をもっているものについて、三地区それぞれの平均値は5、6カ月時で群馬、長野ともに85%、愛育90%となっており、9カ月の時点では群馬87、長野81、愛育88%で三地区の間に大きな開きはないが、愛育はやや高く、長野は低い傾向があった。

以上総合すれば、2回目の調査では各地区とも80%以上のものが食欲に問題がなかった。

山内他：児の栄養方法与母体の出産前後の諸条件の關係

また食欲に問題のある比率は母乳群がやや高い傾向を示した。

食欲の評価は多分に主観的な要素が入るので、客観的な判断はむずかしいことも考えられる。

5) 睡眠時間について

妊娠5、6カ月の睡眠時間は7~9時間のものが約%すなわち群馬、長野、愛育それぞれ70、82、76%となっていた。残りはほとんどが9時間以上で、7時間未満のものは長野に3名あったきりである。7~8時間睡眠のものは都市に多く、8~9時間のものは農村に多い。しかし9時間以上睡眠をとるものが群馬30、長野14、愛育24%となっているので、群馬は愛育より睡眠時間の長いものが多いことになる。

妊娠9カ月では7~9時間睡眠のものは群馬、長野、愛育それぞれ67、78、69%で前回よりやや下廻り、9時間以上が僅かに増加していた。

7時間未満のものが群馬1、長野4、愛育2例あった。

乳児栄養法と睡眠時間の間には一定の關係はみられなかった。これはほとんどの妊婦が十分に睡眠をとっており、特に睡眠不足の心配がなかったためと考えられる。

6) 昼寝について

群馬と長野では昼寝の回数にあまり差異が認められなかったので、両者を平均して農村とした。

昼寝の回数は第9表のように、全く昼寝をしないものは5~6カ月では農村は栄養法の別なく60%前後、都市では母乳群45%で、しないものが母乳群が多かった。9カ月の時点での調査は都市では逆に母乳群が18%、人工群44%で母乳群が少なくなっていたが、農村では人工15、

第9表 昼寝の回数(%)

		農 村			都 市		
		母乳	混合	人工	母乳	混合	人工
妊娠 5 ~ 6 カ 月	0	61.4	60.0	59.3	45.4	36.0	31.3
	1~2	27.2	26.7	33.3	39.4	48.0	62.5
	2以上	5.7	11.1	7.4	9.1	8.0	6.2
	時々	5.7	2.2	0	6.1	8.0	0
	不明	0	0	0	0	4.0	0
	計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
妊娠 9 カ 月	0	34.1	48.9	14.8	18.2	28.0	44.0
	1~2	53.4	31.1	11.1	54.6	64.0	37.0
	2以上	12.5	17.8	44.5	24.2	8.0	19.0
	時々	0	0	25.9	0	0	0
	不明	0	2.2	3.7	3.0	0	0
	計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

混合49%となって、昼寝をしないものは人工群が最も少なく混合群が最も多かった。

昼寝と児の栄養法の間には特別の關係はみられなかったが、これは夜間の睡眠が十分とれているものが多いためであろうと考えられる。

4 結 論

妊娠婦に対する栄養指導の指針を得るために、また母乳栄養の増加をはかるために、昭和46~47年に実施した群馬県中之条町81例、長野県更埴市79例、愛育病院75例について妊娠5、6カ月、9カ月、および産後1カ月の前後において従断調査を実施した。

今回は対象者を栄養法別にわけて、家庭環境、学歴、母性意識、妊娠中の健康状態、食欲等について乳児栄養法との關係を検討した。

その結果は次の通りである。

1) 母乳栄養について

①夫婦のみの核家族、②子供のある核家族、③しゅうと、姑との同居家族の三群について比較した。都市農村ともに、夫婦のみの核家族に母乳栄養が多かった。子供のある核家族の母乳栄養の比率は夫婦のみの家族よりは少なく、農村では同居家族の母乳栄養よりも下廻った。

2) 母親の学歴と母乳栄養

母親の学歴と乳児栄養法との關係を検討した処、中卒が高卒より母乳栄養が多かった。

大卒、短大卒、高卒と母乳栄養の間には特別な關係はみられなかった。

母乳栄養で育てたいと表明した母親が、母乳を撰んだ理由は「子供の健康によいと思う」が第1位を占め30~40%、第2位は「母乳は自然であるから」というものであった。

しかし短大卒では「母と子の愛情が深められるから」という心情的な理由が第2位であった。

3) 妊娠中の健康状態と母乳栄養の關係

妊娠中の健康状態の良好なものは妊娠5・6カ月では群馬、長野、愛育それぞれ33、18、25%で%またはそれ以上の者が何らかの訴えをもっていた。しかし妊娠9カ月の時点では群馬92、長野、愛育共77%のものが健康状態が良好であった。そして母乳栄養と健康状態の間には特別の關係はなかった。

健康状態不良の内訳は各群ともつかれが最も多く、この訴えは農村より都市のほうが多く、風邪、頭痛等は都市より農村のほうが多かった。

また分娩時に異常のあったものは人工群に多かった。

4) 食欲と母乳栄養

「食欲がない」「むら」等食欲に問題のあるものは5～6カ月、9カ月ともに群馬を除けば母乳群に多く、人工群は少なかった。

「食欲がある」「普通」等正常な食欲をもっているものは、地区別にみれば愛育に多く(90～88%)長野がやや劣って(85～81%)いた。しかし食欲に問題のあるものは各群平均15%前後で、長野の18%が最高であった。

5) 睡眠時間

対象妊婦の睡眠時間は7～9時間が最も多く、%を占め残りが9時間以上であった。7時間未満のものは群馬1、長野4、愛育2例あったきりである。

6) 昼寝

昼寝を全くしないものは5～6カ月で農村約60%、都市31～45%で、農村が多かった。

栄養法と睡眠時間および昼寝との関係はみられなかったが、これは夜間の睡眠が十分とれているためであろう

と考えられる。

乳児栄養法と食事の関係は第3報にまとめて報告する。

この調査に長期間にわたって終始御協力いただきました中之条保健所長後藤敬子殿、保健婦長荒井さだ殿はじめ管内保健婦の方々、更埴市役所の中村コスイ保健婦長始め保健婦の皆様および愛育班員の方々に厚く御礼申し上げます。

文 献

- 1) 原田節子他、新生児の養育の改善に関する研究、日本総合愛育研究所紀要 第8集 昭48
- 2) 牛島義友他：妊娠婦の心理についての質問紙法による調査、日本総合愛育研究所紀要 第8集 昭48
- 3) 松島富之助：母乳栄養の減少傾向とその背景に対する文献的考察、日本総合愛育研究所紀要 第7集 昭47